

【OPENING】

「見えたぞ！ ゲシュペンス島だ！」

見渡す限りの青い海の中に、ぽつんと浮かぶ島が表れた。

君は一攫千金を夢見て、モンスター娘たちが暮らす島……ゲシュペンス島に向かっていた。島にはたくさんのお宝があるという噂だし、時にはモンスター娘そのものを密漁して売りさばくものもいるらしい。

君がどんな動機や手段で大金を得るつもりかはともかく、ここまでやってきたからには泳いで帰るというわけにはいかない。

デッドオアアライブの戦い。推力強い船にまたがりめざす先 島は もう近い。

「お前、島は初めてか？ 見かけない顔だな」

君は……

少年だ→ [【1】へ進め。](#)

青年だ→ [【2】へ進め。](#)

老年だ→ [【3】へ進め。](#)

女性だ→ [【4】へ進め。](#)

【1】

「いかにも新入りって感じだな！」

密猟者たちのなかではひとときわ幼い君の姿を見て、周囲の男たちが笑う。

「あの島のモンスター娘たちは少年が大好物って噂だ。おとりに使えるんじゃないか？」

君は心の中でつぶやく。甘く見ていられるのも今のうちだ。

[【5】へ進め。](#)

【 2 】

「頼りになりそうじゃねえか」

君の体つきを見て、密猟者たちは一目置いてくれたようだ。

「得意なのは剣か？ 弓か？ それとも魔法使いとか？」

しばらく歓談に付き合うのもいいだろう。周囲の密猟者たちと話し合いながら、船が島へ近づいていくのを待つことにする。

[【 5 】へ進め。](#)

【 3 】

「ベテランには敬意を払え。生き残っているってことだ」

君の背後にいた密猟者が何やら訳知り顔で言った。

君は何も語らず海を見ていた。老年と海。

[【 5 】へ進め。](#)

【 4 】

「女だてらに密猟者とはやるじゃねえか」

「おい！ 今の自制をかんがみて性別によって扱いを変えるのはハラスメントだぞ！」

「ああ？ コンプラなんか知ったことか」

「そうやって略語でごまかすんじゃなく言葉の意味を理解して正しい態度を学ばなければ正しく社会的責任を果たすことはできねえんだぜ」

何やら盛り上がる密猟者たちを後目に、君は島を見つめていた。

[【 5 】へ進め。](#)

【5】

「モンスター娘だー！」

突然、船体が大きく揺れた。

海中から現れた、タコのような太い触手が船に絡みつки、這い上がってきている。

「クラークン娘か！？ 船を沈めるのとたこ焼きを売るのが趣味という……」

どんな趣味だよ。とツッコんでいる場合ではない。

「へっ！ この船は特注品だぜ！ いくら強力なモンスター娘とはいえ、そう簡単に沈められるなんてことは……」

バキィ！

フラグ満載なセリフを最後まで言い終わる前に、船体が真っ二つに折れた。

この船はもうダメだ！

船とともに沈むか、海を泳いで島にたどり着くか、二つに一つ。

選択の余地はない。君は決死の覚悟で海に身を投げた。

【6】へ進め。



【 6 】

ザザーン……ザザーン……

波音が聞こえる。君の意識はもうろうとしていた。

体が冷たい。海の中で体温を奪われながら、なんとか海岸にたどり着き……しかし、もう立ち上がる気力さえ残っていない。

「おやおやー？ また人間が流れ着いてる」

声が聞こえた。若い女のような、無邪気な少年のような、そんな声だ。

「いけない！ 体が冷えきっちゃってるよ。かわいそうに……」

温かな手が君に差し伸ばされる。うっすらと目を開けると、紫色の瞳が君を覗き込んでいるのが分かった。若々しく、そしてどこか妖しい。

「そうだ、こんな時に……ほら、これを飲んで」

君のもとに駆け寄ってきた何者かが、小さな瓶を君の口にあてた。抗う気力はない。甘いような、苦いような、不思議な味の薬がのどに流れ込んでくる……

君が少年なら、[【7】へ進め。](#)

君が少年でないなら、[【8】へ進め。](#)

【7】

「いやあーよかったよかった。たまたま全快ポーションを持ってよかったよ」

君を助け起こしたモンスター娘は尖ったツノ、蝙蝠のような羽、黒くつややかな尻尾を備えていた。見かけはどことなく少年のようにも見える。

「ボクはタンタル！ インキュバス娘だよ」

インキュバス。いわゆる淫魔だ。

「礼には及ばないよ。ふだんはいがみ合う密猟者相手でも、危機には助け合う……それが人情ってものだからね」

なんと、モンスター娘とはこんなに温かい心を持っていたのか。

感動する君の体を支えるように、タンタルが君の背中に抱き着いた。ほのかながらははっきりとした、柔らかな感触が背中に当てられる。

「さあ、少し休んだほうがいい。目立たなくてふかふかな寝そべりやすいところへ連れて行ってあげるからねえ」

邪悪なたくらみを感じて振り払うなら

【10】へ進め。

善意を信じて連れて行ってもらうなら

【11】へ進め。



【 8 】

冷えていた体が、突然火をつけたように熱くなった。

体力を失っていた君の体にみるみる力が湧いてくる。

「おおー！ よかったね、ちゃんと薬が効いたみたいだ」

意識もはっきりしてきた。だが、何かがおかしい気がする……

「アイヤー！ その薬を飲ませてしまったか？」

たまたま通りがかったキョンシー娘テンミィが声を上げた。

「その薬はどんなケガや病気も治してしまう代わりにどんな人もシヨタにしてしまう非劇的呪いがあるのヨ」

それだけ言うとキョンシー娘は去っていった。

そう、君が目覚めると、自分が砂浜で一人のシヨタになっているのを発見した。君はあおむけに横たわっていて、すべすべしたおなかが見える。若木のようなしなやかな両足は今まで来ていた服とサイズがあっていない。

「これはいったいどうしたことだ」と君は思った。

「命の危機だったんだから、仕方ないよね！」

目の前のモンスター娘はテヘペロした。

[【 7 】へ進め。](#)